



A TREASURY OF JAPANESE LITERATURE

日本の文学

41

中野重治

中央公論社

日本の文学 41

©1967

中野重治

昭和42年2月25日初版印刷
昭和42年3月4日初版発行

価 390 円

発行者 山越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 東京プロセス株式会社
色刷口絵印刷 株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙 本州製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製本 矢嶋製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

中野重治詩集

春さきの風

鈴木・都山・八十島

村の家

歌のわかれ

むらぎも

萩のもんかきや

山猫その他

閏二月二十九日

『歌のわかれ』序

432

「暗夜行路」雑談

434

芦田総理大臣の施政方針演説にたいする質問

461

高野長英のはしご段

469

注 解

471

解 説

小田切秀雄

488

年 譜

503

口 絵

「福井城趾光景」

高田博厚

挿 画

高田博厚

中野重治

中野重治詩集

大道の人々

どこからともなく彼らはやって来た

弱った紋つきの男は高島易断の人相見を始めた

紙をひろげて悪い人相を書いて人々に示した

一つの横顔を上から下へ書いていった

しかし眉や目や口などは

前から見たところを書いていった

彼はうすっぺらな書冊をひらひらさせた

そのなかに人の一生の運命が細大もらさず書いてある

といった

それを読めば成功うたがないといった

けれどもそれを売る彼は弱った紋つきを着ていた

角帽に袴をつけた若い男は医業分業改正案を叫んでい

た

彼は医者をつくる薬がどんなものであるかを発いて見

せた

彼は一枚の紙を示してこれが処方箋だといった

彼をかこむ群集の間から手が出てそれを買いとつた

並樹の桜の下に毛布をしいた角刈の男は手品をはじめ

た

おしまいに彼は自分の鼻の孔へ釘をうちこみはじめた

長い光る五寸釘を鼻の孔に入れて下駄でかんかんたた

いた

釘はすこしずつ中へはいっていった

うちこんでしまうと彼はふがふがといって見せた

そういうあぶなっかしい藝がはじまるまで見物は立っ

ていた

しかしそういう藝がすむと見物はそろそろ歩きだした

大いは一銭の銭もほうらずに黙って歩きだした

四辻には猿曳がいた

せた

小さな太鼓をたたきながらときどき猿を手元へひきよ

せた

見物のなげた芋の皮を猿はまたたきしながら器用にた

べた

今日はおひがんの中日だ

たくさんお買いしろ

猿曳が猿の顔も見ないでどなった

どこからともなく彼らはやって来た
数知れずやって来た

砥石

安全剃刀

キンの指輪

おっとせい 蘇鉄の果

夜は夜で朝鮮餉

それからくじびき

彼らは一様にくろい顔をしていた

キンの入れ歯をしていた

あるものは暑いさなかによごれた袷を着ていた

あるものは木枯しのなかに麻裏草履で立っていた

どこからともなく彼らはやって来た

そしてどこかしらこつそりと帰って行った

昼となく夜となく彼らはやって来た

そしてピストルを射ったり大声に叫んだりして人を集

めた

ここから内らへはいってはいけないといって杖で円を
かいた

べらべらとしっきりなしにしゃべり続けた
見物が笑って見ていてくれるとき

自分がよどみなくしゃべり続けられるとき

そのときが彼自身もつとも幸福であるかのように

見物が散ってしまった

見物の集まり具合が思わしくなかったりと

彼らはとなりのやはりそのような男に話しかけた

その僅かな言葉は

通りすがりの人の耳にあわれにひびいた

寒い地方 暑い地方

諸国をまわって来たその僅かな言葉は

その季節季節の風のなかにあわれにしわがれて消えて

いった

浦島太郎

今宵は雨がふって

ついその家ではまた蓄音機をはじめた

童女がはかなげな声をはりあげて浦島太郎をうたうの

だ

浦島太郎は亀にのり……

乙姫様のお氣に入り……

白がのじじいとなりにけり

お前もうたつてごらん

そしてこれは誰のことをうたつたものか教えてくれ

しらなみ

ここにあるのは荒れはてた細ながい磯だ

うねりは遙かな沖なかにわいて

よりあいながら寄せて来る

そしてこの渚に

さびしい声をあげ

秋の姿でたおれかかる

そのひびきは奥ぶかく

せまった山の根にかなしく反響する

かんじような汽車さえもためらいがちに

しぶきは窓がらすに霧のようにもまつて来る

ああ 越後のくに 親しらず市振の海岸

ひるがえる白浪のひまに

旅の心はひえびえとしめりをおびてくるのだ

爪はまだあるか

お前は

ひろい臉をまどかけのように下ろして

その蔭からいつまでもものぞいていた

お前は

そのあいだじゅう爪を噛み

つばきはお前の指さきをぬらした

爪はまだあるか

お前の 倅をたずねてわたしは鏡のなかに目をつぶる

わたしの臉は美しいあのかあてんのようにでない

わたしは十本の指をのぼして一枚一枚に爪をしらべる

爪のおもては曇って

衰しいくれないの色が浮んでいない

それにわたしの爪は

恐らくおいしくはないだろう

爪は お前の爪はまだあるか

あかるい娘ら

わたしの心はかなしいのに
ひろい運動場には白い線がひかれ
あかるい娘たちがとびはねている
わたしの心はかなしいのに
娘たちはみなふつくと肥えていて
手足の色は
白くあるいはあわあわしい栗色くりいろをしている
そのきやしゃな踵かかとなぞは
ちょうど鹿しかのようだ

眼のなかに

眼のなかにまっかな斑点はんてんがあらわれた
青味をおびたうす黄いろの白地に
朝やけのように美しくかたまっている
しくしく泣いているようだ
がらすのすぼいどで辛い目薬をたらし
しずかに見ていると
女を愛するようないしい思いが湧わいて来る

挿木をする

今日は三月二十三日
仄ひそかにこな雪がちらついて
あたたかな春の彼岸の中日です
おいで妹たち
僕らは挿木さきをしよう
祖父さんやそのまたお祖父さんたちがやったように
今日はほとけの日で挿木の日だ
雪は僕らの髪の毛にかかろう
そして挿木はみずみずと根をさそう

わかれ

あなたは黒髪をむすんで
やさしい日本のきものを着ていた
あなたはわたしの膝ひざの上に
その大きな眼を花のようにひらき
またしずかに閉じた

あなたのやさしいからだを



わたしは両手に高くさしあげた
あなたはあなたのからだの悲しい重量を知っています
か

それはわたしの両手をつたって

したたりのようにひびいて来たのです

両手をさしのべ眼をつむって

わたしはその沁みてゆくのを聞いていたのです
したたりのように沁みてゆくのを

たんぼの女

そうです

何というおだやかな日和でしょう

空はすっかり晴れあがって黒い鵜が渡って来る

そしてたんぼに 稲の荳株にはひこばえが生じ
そこにあなた方は坐っている

あなた方は三人 小さな筵の上で話をしている

そして通りすがりの私に向っていかにもなつかしげに

言葉をかけてくる

たんぼに坐っている三人のやさしい女の人
私もそこへまじりに行きたい

そこへ行つてそこに坐つて
その特別な話が聞いてみたい
けれどもあなた方

あなた方は遊女でわたしは生徒です

えええ ほんとに穏かな日和ですよ

ここはなわて路です あなた方の街の裏の細い一本の

たんぼ路です

私もそこへ気さくにまじりに行きたいのです

それなのに私は帰らねばならぬのです

さよなら たんぼの女の人

私はほほ笑みを一つ返します

たと日光をお吸いなさい

たとときれいな空気をお吸いなさい

私はもう帰ります

さよなら たんぼの人 たんぼの三人のあなた方

私は月をながめ

私は月をながめ

お前のことを考える

私はお前に逢いたい

月は中空にあんなに光っている
そして私は思い出す

私の足の下を掘ってゆくならばお前の国へ出るという
ことを

私の足の下にお前はさかしまになって歩いている
お前と私とはおなじ月を眺めることができない
雲のない満月もあかい月蝕もひとつも見られない
月の光もお前と私とを一しよに照らすことはようしな

対蹠のくに

なんという遠方だろう

私は月をながめ

私はお前に逢いたいのである

今日も

通りには今日も大勢の女がいて
きらびやかな口をきいていた
みんな行く先があるのか
あかい耳朶をして手をふって
ずんずん私はおい越された

このひろい東京の町にお前がない

このひろい東京の町にお前がないというのはつまり
どういうことなのだろう

あんな女どもにさえおい越されて
朝から

心をはりつめてはりつめ
顔をあおくして行く先がない

水辺を去る

私はこのしずかな水辺を去りましょう

今日は水さえも私をいとうている

水の心はおとなしい故

それとみずからは言い出さない

ただ私が向うの方へ行くならば

水は彼自身のしめやかな歌をうたい始めるでしょう

私はしずかなこの水辺を去りましょう

水がそれを乞うているようです

夜が静かなので

何事も意にまかせず空しく六十になる父のかなしみが

髭なぞは白くなって、舂をかいで眠っている

大きな不幸でも来るように、しょっちゅう心配でならぬ

母のかなしみが

晩には、いった風呂のせいで、煩のとがりにあわれな赤味

をさして

口をあいて眠っている

その母に抱かれるようにして

その母とさつき泣き泣きいさかいをした

すこし正直すぎる出戻りの姉娘のかなしみが眠ってい

る

みんな炬燵には、いって眠っている

向うではまだ稚いかなしみが二つ

一つは物どころがつきそめて

一つは何やら何もわからず

おなじ夜着のなかでもう眠入ってしまった

そしてこのうからやからを担いで行かねばならぬ息子

のかなしみが

どうやら火鉢を撫でながらまだ眼をあいている

息子のかなしみはさつき昆布茶を飲んだ

ことごとくというのは、汽車にひかれた隣りのびっこ猫だ

庭さきを通るのはあれは風だ

もう二日もすればまた正月である

息子よ

今夜あたしは

そのおろかな記憶をすこし甘やかしてやれ

ぼろ切

こんな古い麻の葉模様なんぞは棄ててしまおう

もうおれには

こんな古いぼろ切を大事にしまっておくのが恥し

くなってきた

ぼろぼと一しょにして

三国の浜へ持つて行つてさっぱりと流して来ることだ

おれはうんと飯を食つて

それから舂をかいで眠つてやろう

人の心のなかへ降りて行くのはもう止しだ

こんどは浮きあがる番だ

さあ浮きあがれ うかべ

このやくざな心臓にささらをかけて

はたきを贈る

大学前の一軒の荒物屋の店さきに吊してあったのだ



金五錢だったのだ

領にさすわけにもいかなんだ

腰にさすのものはばかられた

おれはその白いふさふさを

通りにいる子供の顔にさしつけてやった

そしてくるくると廻してやった

すると白いふさふさの間で

丸めた眼や細めた眼やのたくさんの笑いが花咲いた
ある笑いの如きはよろこびに揺られて逃げて行った

君は知ってしよう

東京というところは兇悪な都会だ

その兇悪さは 影のように忍びこんで来る煤やほこり

に映じている

それに君は毎日 君の生活を あれらの判任官どもの

間ですりへらしている

そしてそのために君の言葉は粗くなってくるのだ

見たまえ

これは繊維の濃かな哀しい日本紙の手ざわりだ

そしてこれには無邪な少年の笑いの祝福が匂っている

美しい日曜の朝に君の部屋の掃除をして

この清浄な白いふさふさでもって

君は君の書物や机のあたりを払いたまえ

君の心にふりかかって来る煤とほこりとを払いたまえ
そしてしとやかな言葉づかいで静かな半日を憩いたま
え

噴水のように

そいつらのいるのは煙のような遠方で

お前はその方角を指さすことさえできない

そいつらを呼びよせようにも

お前の息は短いし お前の咽喉はもう紅くはない

そしてそいつらはどれもこれも

みんな些細なめめしい記憶なのではないか

そんなものにいつまでもかかり合っているものなら

お前の感情は間もなく古びてしまうだろう

そうだ こんなものにかかり合っているうちには……

ただそいつらはどれもこれも

めめしい けれど金の色をした記憶なのだ

それが金の色をしているというばかりにおれは

胸を疼かしたりしていまだに棄てきれないでいるのだ

日本の冬の夜は酒の糟売りが来て寒い